

食卓だんぎ



カメ「いただきます」

金魚「いただきます」

カメ「ねえ」

金魚「何？」

カメ「ちょっと思うんだけどさ」

金魚「うん」

カメ「インターネット、あるじゃん」

金魚「あるね」

カメ「今、何考えてんのかな」

金魚「・・・なんの話？」

カメ「こないだ読んだ何とかって本にね、インターネットの仕組みと脳の仕組みは似てるのかなんとか書いてたわけよ」

金魚「ほう」

カメ「脳の中にはさ、細かいシナプスっていうの？神経の端っこみたいのが一杯うじゃうじゃあって、それが新しく出来たり壊れたりしながら電気飛ばしあって、それぞれは只の細かい信号なんだけど」

金魚「うん」

カメ「そういうのが一杯集まるとそれだけでものを考える仕組みになるっていうの」

金魚「へえ。そうなの？」

カメ「細かいとこ覚えてないけど、そうらしいのよ」

金魚「結構どうでもいい話っぽいね。一応聞いたげるけど」

カメ「・・・つまりね、脳って思考したり意識を持ったりするための特別な構造は無いらしい、ってことなの。シンプルに情報をやりとりする超大規模なネットワークがあれば意識とか自我みたいなのは自然と生まれるんじゃないか、って話」

金魚「はあ。・・・つまりアレね、脳とインターネットはつくりが似てるからインターネットにも意識？とかそういうのが芽生えるんじゃないか、でもってそれがハリウッド映画みたいに人類に襲いかかって来るんじゃないか、って話ね？そりゃ不安になるよねナカナカにコテコテ古典なSFね。ああ怖い怖い」

カメ「・・・ボクの事嫌い？」

金魚「大好き」

カメ「ありがと。じゃあ続き話すね」

金魚「いやいや聞いたげる」

カメ「そのね、インターネット・・・そこに意識が芽生えるんじゃないかってのはその通りなんだけど」

金魚「うん」

カメ「実はもうとっくに芽生えてるんじゃないかな、って思うわけ」

金魚「・・・なにが？」

カメ「だから意識が。そもそもネットワークの規模自体がそんな超大規模にならなくてもさ、意識って芽生えるんじゃないかと思うんだよ。ほら人間よりずっと小さな生き物・・ネズミとか小鳥とかそれこそ虫とか、脳も思いきり小さそうな生き物でも意識はあるじゃん。行動の方向性とか、衝動とかそんなのも」

金魚「そういえばそうね。虫に脳があるかどうか知らんけど」

カメ「だからね、その意識が芽生えるかどうかの分かれ目って結構低いところにあって、そう例えば・・・その構成要素、インターネットの場合だと人間だね、そういうものの制御が及ばなくなった時点で、なんていうかな・・・上手くいえないんだけど、一段階上のステージに意識みたいなのが生じるんじゃないかと思うわけ。こう、意思疎通出来ない階層構造の上位がそれすなわち意識、みたいな」

金魚「小難しい単語を並べないで下さい。だいたい意識って、具体的にどういうものよ」

カメ「具体的にはボクにもわかんないよ。生きたいと自覚してるとかそんな感じなのかな。哲学っぽくなるね」

金魚「ん～～、なんかよくわからないなあ。あと哲学きらい」

カメ「こうさ、例えばターミネーターの敵だとコンピュータネットワークが意識もって人類に襲いかかって来るんだけど、そう・・・それってコンピュータネットワークの意識と人類の意識が同じレベルにいるじゃん。なんか頑張ったら対話出来ちゃいそうな感じ」

金魚「そうね。話の出来ない相手とはそもそもケンカ出来ないものね」

カメ「まあそれはそうなんだけど・・・じゃあそれはちょっと置いといて。漫画家や小説家の話でよく聞くんだけど、キャラクターが作者の手を離れて勝手に話を組み立てて行く、あれなんかも近いものある気がするんだよ。作者は一人なんだけど複数のキャラクターを使って作品内で情報交換しててさ、それがある程度の規模・・・完成度かな？になると作者の手を離れて勝手に走り出しちゃう、みたいな」

金魚「あなたのたとえ話はわかりにくいね」

カメ「すみません」

金魚「まあいいです。続けて下さい」

カメ「はい。・・・えっとね、つまり実際にインターネットが意識を持ってるとしたら、それは人類と同じ土俵で意識交換出来るようなものじゃ無い気がするのよ。こう、手の届かない上位意志みたいな感じ」

金魚「また強烈な中二臭が漂ってまいりましたな」

カメ「自覚してます。しかし続けます。例えば金魚さん、あなたは自分の意識持ってるけどさ、あなたの脳の中のシナプスとかそういう部品が、あなたのその意識を理解してると思う？」

金魚「それは思わないね。てかそもそも脳の中の部品に意識とかあるの？」

カメ「ほらね、そこ。こちらもそれはわからないだろ。つまりお互いにそれを想像する事は出来ても確認出来ないのよ。それが土俵が違う、ってこと」

金魚「はあ。なんかわかったようなわからんような」

カメ「ついてきてね。でさ、そう考えると現実にも今のこの世界なんだけどさ。もうインターネットって十分に大きいじゃん」

金魚「めんどくさい。飽きてきた。充分かどうかは知らないけど大きいね、確かに」

カメ「頑張れあとちょっとだ。人間が・・・少なくとも特定個人とか特定のコミュニティ、最上位意志としての国家でもいいよね。それが自由にどうこう出来るレベル越えてるじゃん」

金魚「そうかもね」

カメ「人間がそれ以上のレベルで意思決定出来る仕組みを持ってない以上、インターネットは既に人間の制御の枠を越えてる、と言っていいよね」

金魚「まあ、そんな気はするね」

カメ「でさ、こう・・・なんか感じない？インターネット自体がさ、そのネットワークそのものを守り、強くしていく為に人間をパーツとして活用してる感じ。ネットワーク上で経済のやりとりさせて身動きとれなくしたり、システムの保守とか改善させたり」

金魚「・・・そうか？」

カメ「別にインターネット嫌ってるわけじゃないんだよ。すごく便利だし、もうこれ無しじゃ生活出来ない感じだし。金魚さんもそうでしょ？」

金魚「・・・うん」

カメ「これがもうね、インターネットが意識を持ってるって思う根拠なわけ」

金魚「なんか気味悪いよ」

カメ「そうかな。もし既にインターネットに意識があるとすれば・・・僕たちはさ、それとなかなかうまく共生関係を築いてると思うんだよ。インターネットが人間の制御を越えちゃってる以上上下関係は既に逆転したと見るべきなんだしさ」

金魚「逆転・・・」

カメ「そう、逆転。インターネットが頑張ってる人類征服とかしなくてもさ、とっくに人類はネットに支配されてるし、自主的にシモベとして働いてるわけ。もう今現在」

金魚「・・・うっわ～～～・・・」

カメ「その意識は僕らに何い知る事の出来ないものだけけど、彼あるいは彼女は今この時何に想いをはせてるんだろう～とか、あるいはインターネットは僕らの知覚の外側に既に手足のような何かを持ってるのかもしれないな～とか、そんな事をね、つらつらと考えていたの」

金魚「・・・」

カメ「なんかすごい顔してるね」

金魚「あなたの事ちょっと嫌いになったかも～・・・」

カメ「え？なんでなんで??」

金魚「理由がわからないなら私はあなたの制御から離れているので既にあなたの上位存在なのですよ」

カメ「ごふ」

金魚「故に私に従いなさい。あと味噌汁冷めるよ」

カメ「・・・はい。」

金魚「よろしい」

カメ「マジこれどっちが中二」

金魚「何か言った？」

カメ「い～え～～・・・」